

[書 評]

Aquinói Szent Tamás CATENA AUREA I.
Kommentár Máté evangéliumához
Szerkesztette: Benyik György,
Fordította: Benyik György és Lázár István Dávid,
Lektorálta: P. Nemeshegyi Péter SJ
Szeged: JATE Press, 2000, pp.852, ISBN: 963 482 345 9, 2587.-Ft.

秋 山 学

本書は、トマス・アクィナス（1225-74）による『カテナ・アウレア』のうち、『マタイによる福音書』部分（全28章）のハンガリー語による全訳である。本書の刊行年次は2000年であり、最新刊ではない。また本書はトマス・アクィナスによる原著作の近代語訳であるとは言え、著作ないし論文集ではない。けれども、わが国では研究状況がほとんど紹介されていないハンガリーの出版物であること、また「査読者」（lektorálta）として、2020年に97歳で帰天され日本での活動も長きに及んだネメシェギ・ピーテル師（1923-2020）が関わられていること、さらに訳者のお一人である聖書学者ベニック・ジュルジュ師（1952- ）のために、2020年には浩瀚な記念論集が出版されたことなどの理由から、本書を『中世思想研究』の今年度号で紹介したい。

刊行年の2000年3月2日には、ベニック師が聖書学講座の責任者を務めるセゲド神学院において、本書の書評会が行われている。同案内書（staff.u-szeged.hu/~benyik/index7.html；2022年1月15日最終閲覧）によれば「セゲド神学院聖書学講座およびセゲド大学出版局の共同企画として、これまでほとんど哲学者・神学者としてのみ知られてきたトマス・アクィナスの筆になる本書が出版された」とある。さらに「このハンガリー語訳は、聖書学者としてセゲド国際聖書学会を主宰するベニック・ジュルジュ師と、ネオ・ラテン語学者で文学史家のラーザール・イシュトヴァーン・ダーヴィド氏（※1986年よりセゲド大学教授）の共訳になる」と記されている。この『カテナ・アウレア』のハンガリー語訳は、現在のところ『マタイ福音書』に関してのみ上梓されているとのことであるが、トマスの原著を通してだけでなく、11年におよぶこの共同体での作業の背景を通じ

て、われわれが本書から学び取ることのできる事柄は多い。

本書は 850 頁を超える大冊であるが、その「あとがき」(825～28 頁)によれば、原著は 1261 年になされたローマ教皇聖ウルバヌス IV 世(在位 1261-64)の要請により、パリにおいて 1269～72 年に執筆されたものだとされている(826 頁)。この点は、ウルバヌス IV 世が 1264 年 10 月 2 日に没したのに対し、本書が同教皇に献じられていることから 1263/64 年成立説を採るドミニコ会系の研究者たちとは異なり、またマタイと他福音書のカテナで成立時期が別だと考えるにしても通説ではない。本訳書は、1845 年のナポリ版、および 1952 年トリノで出版されたマリエッティ版を勘案し、それらを底本としたとのことである。「あとがき」に続いては、この分野に不案内な読者のために、この著作中に引用される著作家と異端諸派についての辞典(829～48 頁)が付されている。

「カテナ」とは「鎖」を意味し、これは中世に栄えたジャンル名であって、聖書のある箇所についての教父の解釈をめぐり、読者が速やかにそれらを通覧する必要から生まれた「便覧」だと言える。教父たちによる多数の作品は、このような「カテナ」を通じてのみ現在に伝えられているばかりでなく、聖書本文に関しても、古きに遡り他ではもう見出し得ない異文が「カテナ」により伝えられる場合があることが知られている(825 頁)。

トマスによる「カテナ」は、四福音書それぞれについて遺されているが、それらは古来、「アウレア」(「黄金の」)という尊称とともに、特別の敬意をもって伝えられてきた。「カテナ」というジャンルの起源は紀元後 5 世紀に遡るが、その全盛期は中世に置かれ得る。この時期とは、読者に対して一層完全な情報を提供するため、折衷主義に堕してしまったカテナの中に、相互に対立する見解をも挙げるようになった時点である(同上)。

この作品「カテナ・アウレア」には、総数で 54 名にのぼる古代キリスト教および中世の著作家が引用されている。彼らは「カテナ」というジャンルのもと、少なくとも中世の高等神学教育においては人口に膾炙した人々であった。諸大学ではほぼ例外なく、マルティン・ルター(1483-1546)が登場する時期にいたるまで、もっぱらこの教科書が用いられた。この事実は、本書が聖書解釈のあり方を長期間にわたってその根本から規定したということの意味し、本書の文化史的な無比なる意義を証する。カトリック教会においてこの書物の影響力は、第 2 ヴァティカン公会議(1962-65)にいたるまで、聖書のテキスト解釈者たちにとって絶大であった(前掲案内書)。

さて、訳者のお一人であるベニック・ジュルジュ師は、ハンガリー南部の中核都市であるセゲド市にあって、毎年欠かすことなく「セゲド国際聖書学会」を主宰しておられるローマ・カトリックのセゲド教区司祭である。師は 1971 年にセゲド神学院を、1975 年にブダペシュトの神学アカデミア(現在のパーズマニ・

ピーテル大学)を修了し(1974年のリケンツィア論文は『ハンガリー語聖書翻訳史』)、77年には神学博士号を取得(学位論文は『19・20世紀におけるハンガリー語による聖書学文献』)、1978年から80年までローマのグレゴリアーナ大学に学んで82年に聖書神学のディプロマを取得された後(提出論文は『エフェソ書における「聖なる人々」』)、先に記したセグド・カトリック神学院で1980年以降教鞭を執っておられる。1997年にはパーズマニ大学にて哲学博士の学位を取得されている。

「セグド国際聖書学会」は、中・東欧圏最大の聖書学会として夙に著名である。その前史は1989年に遡り、1995年の大会以降、現在では口頭発表の論文体が査読のうえ大会翌年アクトに収録され、2020年に至っている(コロナ禍のため2019年以降評者は未渡洪)。2020年にはベニツ師の68歳の誕生日を記念し、総勢66名による特別号『聖書解釈：時代・方法・文脈』が公刊された。これはオンライン版により閲覧可能である(2022年1月15日最終閲覧：<https://drive.google.com/file/d/1j9YdZB-q3lmX3LqzStGIOP5aYmMsTfAv/view>)。

一方、この書を査読する任を負ったのはイエズス会士のネメシェギ(ハンガリー語ではネメシュヘジ)神父であり、前掲の案内書によれば、師は東京のカトリック神学院と上智大学にて、まだラテン語が公用語であった頃、この書物に基づいて講義をされたという。確かにネメシェギ師は1956年来日され、1993年まで日本で教鞭を執られたが、第2ヴァティカン公会議(1962-65)の決定に伴い日本語の使用が認められたわけで、これは師の知られざる側面を伝えるものかもしれない。なお師によるハンガリー帰国後を含めた活動の記念誌として、上智大学神学会編『カトリック研究』第90号(2021年)がある。

また本ハンガリー語訳の編集者は、博士号をお持ちのスーニィ・エテルカ女史であるが、彼女が2021年9月、それまで30年の長きにわたって勤務されたセグド大学出版局(JATE - József Attila Tudományegyetem - Press)を退職される際には、彼女のために記念式典が行われた(コロナ禍のため評者は不参加)。スーニィ女史は、セグド国際聖書学会関連の書籍だけでも50冊以上、通算で1800点にもおよぶ書籍の出版に携わられたという。つまりこの大冊は、セグド国際聖書学会をはじめ、セグド市を挙げてのミレニアムの出版物として2000年に刊行されたものなのである。

本著作に対するわが国での抄訳の試みとしては、本学会員の山口隆介氏や保井亮人氏によるものがあり、中世哲学・中世神学上の一著作という受け取り方が一般的であろう。他国における『カテナ・アウレア』をめぐる出版状況を顧みても、西欧諸国ではドミニコ会の活動が堅実なこともあり、同会修道司祭トレル師の総説書(保井亮人訳、知泉書館、2018年)に載る解説をはじめ、本著作は、スコラ神学者トマスの著作として、ないしドミニコ会の活動の中で、紹介訳出される

ことがほとんどだと言ってよい。それに対してこのハンガリー語訳は、聖書学者ベニツク師自ら訳筆を執り、ラテン語学者および教父学・教義学者との共同作業のうちに、国際聖書学会を基盤に上梓されたという点で特徴的だと言えるのではないだろうか。言うまでもなくそこには、トマスの「カテナ」が、聖書学界における必携書として現在なお有用であるとの認識が共有されている。ハンガリー東部には、ルテニア系に由来するギリシア・カトリック教会の共同体が健在であり、本書の刊行に際し、彼らと有機的に形成された共同体が大前提となっていることは言を俟たない。聖書学ないし中世哲学を単体として考えそれに携わるのではなく、聖書解釈史の上にトマス・アキナスと本著作を置くというハンガリーのあり方から、われわれは、ギリシア教父たちをも含め、改めて包括的に神学を手がける姿勢を学び取ることができるのではないだろうか。